

## 1. 自然環境について

本県におけるRDBの対象水域は「淡水」と「汽水」である。「淡水」としては、大小の河川及び用水路・溝川などの流水性のもので、淡水池・溜池・堤のような止水性のものがある。

河川には、一級河川の江の川・斐伊川・高津川を筆頭に多数の中小河川が、中国山地から日本海に向かって流れている。更に、隠岐諸島や島根半島などの海岸部には、背後の山から、海に向かう多くの流程の短い川がある。

また、高津川や江の川など県西部の河川では、太平洋側の河川に特徴的な淡水魚が生息している。それは、地殻変動によって、瀬戸内海側に流れていた川の一部が日本海側に流路を変更（河川争奪）したことによるものとされている。

「汽水」は、淡水と海水が入り混じる場所に存在し、多くは河川の下流域に形成される。一級河川など水量の多い大型の河川では、下流が平野部を流れることによって、遡上する海水と混じり易いことから汽水が長く形成される。また、中小河川にあっても、海に流入する際には、それぞれの地形に合わせた汽水が形成される。

本県の場合、汽水を代表する宍道湖・中海は一級河川斐伊川の最下流部に位置し、それぞれの湖は安定した塩分を保っている。因みに、斐伊川が流入する宍道湖は海水のおよそ10分の1、日本海と接する中海はおよそ2分の1程度の塩分である。しかし、近年は、海水温の上昇によって、塩分が高くなる傾向にあるとされる。また、神西湖及び日本海に流れる差海川なども比較的安定した塩分を保っている。

## 2. RDBの掲載について

今回の改訂作業によって、かなりのカテゴリーの変動があった。まず、レッドリストの数量の増加があり、前回（2004年）にリストアップされた24種の中でリストから外れた種が1種と、新規に9種が加えられたことで32種に増加した。

次に変更の内容として、絶滅危惧ランクの上昇が2種であるのに対して、逆に下降した種は1種であった。その内容は、絶滅危惧Ⅰ類では、これまでの5種（ゴギ・ミナミアカヒレタビラ・オヤニラミ・イシドジョウ・ニホンイトヨ）に新規記載のワカサギをはじめ、Ⅱ類から2種（カワヤツメ・ルリヨシノボリ）がカテゴリーの上昇として加えられた。

逆に、絶滅危惧の度合いが下がったものは、Ⅰ類からⅡ類にランクを下げたクルマサヨリの1種にとどまっている。

準絶滅危惧では、今回新規として取り上げられた9種のうち5種（ニホンウナギ・ヤリタナゴ・モツゴ・カワヒガイ・セスジボラ）が加えられた。

情報不足では、新規に加えられた2種（ドジョウ、シラウオ）に加え、前回情報不足から掲載が見送られていたタモロコが再度加えられた。また、今回は情報不足として掲載していたカワアナゴは、生息域の拡大が認められるため、今回のリストからは外された。

以上、今回の改訂では、島根県における淡水と汽水域に生息する魚種の絶滅危惧の高まりがいつそう際立ってきたといえる。さらに、今回の改訂において新規として取り上げられた9種に注目

すると、これまで身近なところで普通に親しまれてきた魚たちが、徐々に身近な存在でなくなりつつあることを示している。

そのことは、多くの水辺で魚類の減少が予想以上に進んでいる状況を、今一度再認識していく必要性を強く感じるところである。

また今回の改訂が示すものとして、種の減少に対する危機意識にとどまらず、逆に少ないながらも今でも残る豊かな自然、つまり「いろいろな魚が泳ぎまわっている水辺」を再発見して、魚だけでなくその生息環境をも見守っていくとする姿勢も同様求められる。

## 3. 新しい試みについて

### （絶滅のおそれのある地域個体群の提唱）

現在、しまねレッドデータブックのカテゴリーとしては掲載されていないが、その希少性の観点から今回の改訂時における新規カテゴリー創設への提言として、絶滅のおそれのある地域個体群（LP）を取り上げる。環境省の定めるレッドリストにおける基本概念では、「地域的に孤立している個体群で、絶滅のおそれが高いもの」とされている。

今回取り上げた種は、全国的には普通種でありながら、正にこうした条件に合致するものであり、その危険性等を含めてなんらかの対策が求められると考える。また、他の分類群に対しても、同様な孤立した地域個体群があるのであれば、今回の改訂時には正式にカテゴリーに含めてもらえることを願い、概説内で取り上げることとした。なお、今回取り上げる1種を加えると、汽水・淡水魚類は33種類となる。

（越川敏樹）

種名(和名)：男池・女池（隠岐の島町）のチチブ陸封化個体群

種名(学名)：*Tridentiger obscurus* (Temminck and Schlegel, 1845)

目名・科名：スズキ目ハゼ科

カテゴリー区分：絶滅のおそれのある地域個体群（LP）

#### 【選定理由】

チチブの陸封化個体群は全国的にみても数か所しか知られておらず、希少な個体群である。今後生じるであろう遺伝的・形態的・生態的な変化を含めた種分化方向を知る対象としても、学術的に貴重な存在である。

#### 【概要】

チチブは、本州・四国・九州・朝鮮半島・沿海地方に分布するハゼの1種で、隠岐諸島など日本周辺の離島でもみられる。川と海を往来する両側回遊魚で成魚は全長8cm、他のハゼ類と比較して太く短い体形をしている。内湾や河口の汽水域に生息するが、淡水域にもみられることがある。一般的に、純淡水域を好むヌマチチブと本種は棲み分けしている。ふ化した仔魚は一旦海に下り再び遡上するが、まれに陸封された個体群がみられることがある。産卵は春季から夏季で、転石の下などにオスが産卵室を作り、産卵後もオスはふ化まで卵を守る。雑食性で、底生動物や藻類なども摂餌する。寿命は概ね1年とされている。

#### 【県内での生息地域・生育環境】

隠岐郡隠岐の島町の西郷湾南金峰山に連なる半島の外洋側にあ

る男池と女池は、砂礫由来の砂洲によって日本海と遮断された潟湖である。男池の面積は8.3ha、水深約6mで、女池は面積3.5ha、水深約3mの淡水池で、ここには陸封されたチチブが生息している。これまでに知られているチチブの陸封個体群は、鹿児島県池田湖と大阪城のお堀だけであり、男池・女池のチチブ陸封個体群は非常に珍しく貴重である。両池では、海に下ることなく個体群が維持されている。

**【存続を脅かす原因】**

男池・女池には魚食性の外来魚であるオオクチバスやブルーギルが放流されており、男池では放流前にみられた場所から姿を消し、流入河川のわずかな水域で存続している。両池の生息基盤はせい弱で、環境の変化等により絶滅のおそれがある。

**【参考文献】**

明仁親王（1987）チチブ類。水野信彦・後藤 晃（編）日本の淡水魚類 その分布、変異、種分化をめぐって：167-178。東海大学出版会、東京。

日本魚類学会事自然保護委員会編（2002）川と湖沼の侵略者ブラックバス—その生物学と生態系への影響。152pp。恒星社厚生閣、東京。

向井貴彦・西田 睦（2005）ヌマチチブ非在来個体群におけるミトコンドリアDNAの地理的分布。魚類学雑誌，52(2)：122-140。

鈴木寿之・渋川浩一・矢野維幾（2021）瀬能宏（監修）新版日本のハゼ。584pp。株式会社平凡社、東京。

（佐藤仁志）

**汽水・淡水魚類掲載種一覧**

計32種

**絶滅 (EX)**

- ・ドウクツミミズハゼ

計1種

**絶滅危惧 I 類 (CR+EN)**

- |        |             |         |
|--------|-------------|---------|
| ↑カワヤツメ | ・ミナミアカヒレタビラ | ・イシドジョウ |
| ○ワカサギ  | ・ゴギ         | ・ニホンイトヨ |
| ・オヤニラミ | ↑ルリヨシノボリ    |         |

計8種

**絶滅危惧 II 類 (VU)**

- |           |         |         |
|-----------|---------|---------|
| ・ミナミスナヤツメ | ・サクラマス  | ・ヨウジウオ  |
| ・サンゴタツ    | ↓クルマサヨリ | ・カジカ大卵型 |
| ・イシドンコ    | ・シンジコハゼ |         |

計8種

**準絶滅危惧 (NT)**

- |                  |         |          |
|------------------|---------|----------|
| ○ニホンウナギ          | ○ヤリタナゴ  | ・アブラボテ   |
| ○モツゴ             | ○カワヒガイ  | ・ズナガニゴイ  |
| ・サンインコガタスジシマドジョウ | ・アカザ    | ○セスジボラ   |
| ・アユカケ（カマキリ）      | ・カジカ中卵型 | ・オオヨシノボリ |

計12種

**情報不足 (DD)**

- |       |       |       |
|-------|-------|-------|
| ○タモロコ | ○ドジョウ | ○シラウオ |
|-------|-------|-------|

計3種

**【記号説明】**

- ・：カテゴリー区分変更なしの種（20種）
- ↑：上位のカテゴリー区分への変更種（2種）
- ↓：下位のカテゴリー区分への変更種（1種）
- ：新規掲載種（9種）
- ◇：情報不足からの変更種（0種）
- ◆：情報不足への変更種（0種）

**【掲載順の準拠文献等】**

中坊徹次編（2013）日本産魚類検索全種の同定第三版.2428pp.東海大学出版会、神奈川。

## 絶滅 (EX)

スズキ目ハゼ科

# ドウクツミミズハゼ

*Luciogobius albus* Regan, 1940

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
—	絶滅 (EX)	絶滅 (EX)

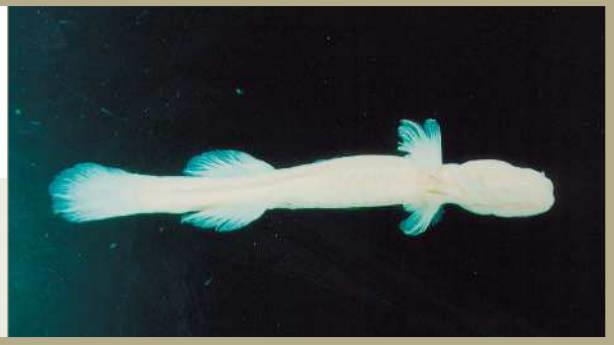
撮影者(提供者): 国立科学博物館

島根県固有評価

基準標本産地

環境省カテゴリー

絶滅危惧 I A類(CR)



### 選定理由

八束町大根島で最後に確認されたのは、1952年8月で、その後の確認例はない。50年以上確認されておらず、生息環境も悪化してきていることなどから、絶滅したものと考えられる。

### 概要

大根島の洞窟で1931年に採集された2標本に基づいて、1940年に日本固有の新種として記載された。生息地は大根島と長崎県五島列島富江町の溶岩洞穴、高知県の新莊川しか知られていない。国内で知られている唯一の洞窟性水生脊椎動物で、全長5cmほど。眼は退化しており、小さな黒状点をなし皮下に埋没している。体表には黒色素胞が乏しく、生時の体色は淡紅色を呈する。他の盲目性ハゼであるネムリミミズハゼやイドミミズハゼに比べて頭が大きく、体長の1/4以上を占める。脊椎骨数は31で、ネムリミミズハゼの36、イドミミズハゼの35-37より少ない。また、近縁のミミズハゼ類に比べ、本種は背びれや尻びれが発達している。地下水中に生息するトビムシ類を餌とすると考えられている。現在、生息が確認されているのは福江町福江島の溶岩洞穴だけである。ここでも採集記録は少ない。本種は、もともと生息個体数がきわめて少なく、生物学的知見に乏しい種である。

#### 参考文献

山口勝秀 (2015) 改訂しまねレッドデータブック2014動物編: 82. 島根県環境生活部自然環境課, 島根。

### 県内での生息地域・生息環境

大根島の溶岩洞窟内に生息していたが、50年以上生息確認がなく、現在は絶滅したものと思われる。

### 存続を脅かした原因

もともと生息数がきわめて少なかったと思われることや、洞窟内の土砂の堆積等による生息環境の悪化など。

### 特記事項

改訂しまねレッドデータブック2014動物編以後、新たな発見に至る調査等は実施されておらず、絶滅を覆す知見は得られていない。

(執筆: 山口 勝秀)

汽水・淡水魚類

## 絶滅危惧 I 類 (CR+EN)

ヤツメウナギ目 ヤツメウナギ科

# カワヤツメ

*Lethenteron camtschaticum* (Tilesius, 1811)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
—	絶滅危惧 II 類 (VU)	絶滅危惧 I 類 (CR+EN)

撮影者(提供者): 桑原弘道

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

絶滅危惧 II 類(VU)



### 選定理由

幼生の生息環境が限られている。洪水と自然災害の多発。ダムや堰堤など河川改修。近年続く夏場の高温。

### 概要

本種の口は吸盤状で顎がなく、魚類より前の脊椎動物の最も古いタイプの無顎上綱に属し円口類などとも呼ばれている。鰓蓋はなく、体側の眼の後ろに鰓孔が7つ並び、眼と合わせて8つになるのでヤツメ(八つ目)と呼ばれる。本種は30-50cmに成長し、尾鰭後端と背鰭先端が黒色で、スナヤツメ類など他の日本産ヤツメウナギと区別できる。

本種は4-7月の主に夜、川を昇り中・上流の砂礫底で4-8月産卵する。稀に秋に遡上し翌年の春に産卵するものもいる。雄が吸盤で小石を取り除いた巣に卵径1mm程の粘着卵を約10万個産む。卵から孵化したアンモシーテス幼生は産卵場を離れ、軟泥の堆積している下流部の縁に流下して穴を掘り潜り、川底のデトリタスや珪藻類を摂取して成長する。2年以上幼生期を過ごし15-20cmに育った後の初めての春、変態し海に下る。海ではサケやマダラなどに吸い付き、吸血して数年かけ成長して川を遡上し産卵し、死んでいく。幼魚を飼育していると、昼間は自由生活を送り、夜にハゼなどの頭部の身を剥ぎ

#### 参考文献

蒲原稔治 (1996) エコロン自然シリーズ 魚1. 保育社, 大阪  
桑原弘道 (未発表) 宍道湖マス網調査 2013-2025年  
宮地博三郎 川那部浩哉 水野信彦 (1983) 原色日本淡水魚図鑑: 54-56. 保育社, 大阪  
中坊徹次編 (2013) 日本産魚類検索全種の同定第三版: 144-145. 東海大学出版会, 神奈川  
山口勝秀 (2015) 改訂しまねレッドデータブック2014動物編: 86. 島根県環境生活部自然環境課, 島根

取り食べていた。漁師の網にかかった個体も魚に吸い付いているのは見ていない。吸着するのは夜のみであろう。

### 県内での生息地域・生息環境

以前は本県のほとんどの1級・2級河川で、生息が知られていたが、現在は多くの河川で確認できにくくなった。宍道湖や中海では2020年以降、川に遡上する成魚をほとんど見かけなくなり、2023年以降は海に降りる未成年も姿を消した。

### 存続を脅かす原因

幼生は川の砂泥底に潜伏して数年もの間過ごすので、河川改修工事などで掘り起こされたり、上から石を落とされたりすると生き残るのは難しい。近年は大雨など自然災害の頻度も増した。そこで洪水がおこれば砂ごと流され、命が残っても一瞬で生息場所が奪われる。成長が遅く産卵するまでの年数もかかるので、一度数を減らすとよい環境があっても増えにくい。

また、多くの河川の随所にダムや堰堤ができ、海とのつながりが難しくなった。中には断ち切られたところもある。近年の高温が続く気候は水温上昇も引き、高水温の苦手な北方種の本種にとって生きづらい環境になっている。

(執筆: 桑原 弘道)

絶滅 野生絶滅

絶滅危惧 I 類

絶滅危惧 II 類

準絶滅危惧

情報不足

## 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

コイ目コイ科

# ミナミアカヒレタビラ

*Acheilognathus tabira jordani* Arai, Fujikawa and Nagata, 2007

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
—	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

撮影者(提供者): 島根県立宍道湖自然館

島根県固有評価

分布限界種(西限)

環境省カテゴリー

絶滅危惧ⅠA類(CR)



### 選定理由

県内での生息地はきわめて少なく、局所的である。近年生息が確認されている河川でも生息個体数の減少や産卵母貝であるイシガイ科二枚貝の減少が顕著であり、近い将来絶滅が危惧される。

### 概要

従来アカヒレタビラとされていたが、山陰地方と北陸地方に生息するタビラは2007年にAraiらによりミナミアカヒレタビラに分類された。県中部の河川はミナミアカヒレタビラの西限分布域である。全長は最大8cm、野生下での寿命は2-3年、繁殖盛期は4-6月である。産卵はイシガイ科二枚貝の中でもカラスガイ族(ヌマガイ等)が主に利用される。本亜種は幼魚期に背びれに黒斑を呈するが、セボシタビラの黒斑より小さく不明瞭である。

### 県内での生息地域・生息環境

県中部および東部の限られた河川の中〜下流域に生息する。県中部の

#### 参考文献

- Arai, R., Fujikawa, H. and Nagata, Y. (2007) Four New Subspecies of *Acheilognathus* Bitterlings (Cyprinidae: Acheilognathinae) from Japan. *Bull. Natl. Mus. Nat. Sci., Ser. A, Suppl.* 1: 1-28.  
 鷺海智佳・古林敏彦・國井秀伸 (2018) 島根県の河川におけるミナミアカヒレタビラの生活史と季節移動. *魚類学雑誌*, 65: 10-20.  
 鷺海智佳・諸澤崇裕・古林敏彦・山口啓子 (2018) 河川汽水域におけるミナミアカヒレタビラの稚魚の分布と微生息環境. *LAGUNA*, 25: 19-29.

河川においては2010年代に本亜種の生息数が減少していた中で、その河川の産卵母貝の大量へい死が確認された。その後も保全の取組みを進めるも、産卵母貝の復活にはいたっておらず、本亜種の野生下における個体群の存続はきわめて危機的な状況である。県東部では宍道湖流入河川等に分布しているが、生息域が限られており、河川や周辺水路の改修等による環境悪化より越冬場所や繁殖場所が減少している。加えて、生息地には本亜種と生息水域・産卵母貝が競合する外来種のタイリクバラタナゴや、肉食性のブルーギルやオオクチバスも数多く生息しており、それらによる影響が懸念される。

### 存続を脅かす原因

河川改修等による生息環境の悪化、外来種による捕食や競合、産卵母貝であるイシガイ科二枚貝の減少等。特に二枚貝類の減少はミナミアカヒレタビラ個体群の縮小に最も大きな影響を与えており、二枚貝類は主に河川改修等の環境改変による生息場の消失やヌートリアによる食害により減少している。

(執筆者: 辻井 要介・鷺海 智佳)

## 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

コイ目ドジョウ科

# イシドジョウ

*Cobitis takatsuensis* Mizuno, 1970

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
—	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

撮影者(提供者): 島根県立宍道湖自然館

島根県固有評価

基準標本産地

環境省カテゴリー

絶滅危惧ⅠB類(EN)



### 選定理由

県中西部の限られた水系にしか生息していない上に、生息に適した環境も限られている。生息個体数も多くなく、大きな移動もしないことなどから、絶滅が危惧される。

### 概要

日本固有の小型のシマドジョウ属魚類で、1970年に高津川水系の福川川で発見され、新種として記載された。全長は通常4-6cmで、最大でもオス6cm、メス8cm未満。尾柄背縁と腹縁に竜骨状隆起が発達し、他のシマドジョウ属魚類に比べ寸胴である。体色は白色から淡黄褐色で、背鰭と尾鰭に3-5本の暗色点列がある。中国地方西部と九州地方北東部に分布している。頬部に明瞭な縦条模様を持ち、背部から体側中央にかけて3列の暗色縦帯を持つものが多い。また、尾鰭の付け根にある黒点は上下に二つあり、上が明瞭である。本種の生態は、河川上流から中流の礫が積み重なる水通しのよい淵尻に生息し、水温が13-15℃になると砂礫底に深く潜り込んで越冬する。6月から8月にかけて繁殖期を

迎え、その時の水温は16-20℃である。孵化した仔魚はしばらく礫底中にとどまって成長する。大きな移動は行わず、雑食性で、天然での寿命は約2年であることなどが分かっている。四国に分布しているものは、2006年に新種とされヒナイシドジョウとなった。その特徴は鼻先から眼を貫いて1本の褐色線があり、頬部には明瞭な縦条模様が無く、尾鰭の付け根にある黒点は小さく、上に一つだけあることなどから、本種と見分けられる。

### 県内での生息地域・生息環境

県中西部の河川の上中流部で確認されている。一部の生息地はダム建設に伴って消滅している。礫が積み重なった水通しの良い場所に生息し、泥の堆積のない淵尻部を好むなど、生息域はかなり限定されている。

### 存続を脅かす原因

ダムの建設、河川改修や流域開発による良好な生息環境である淵の消失、礫底の目詰まりなど。

(執筆者: 山口 勝秀)

#### 参考文献

- 山口勝秀 (2015) 改訂しまねレッドデータブック2014動物編:83.島根県環境生活部自然環境課, 島根.

## 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

サケ目 キュウリウオ科

# ワカサギ

*Hypomesus nipponensis* McAllister, 1963

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
-	-	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

撮影者(提供者): 桑原弘道

島根県固有評価

分布限界種(南限)

環境省カテゴリー

-



### 選定理由

宍道湖七珍の一つで、宍道湖では2004年までは出荷するほどの漁獲があったが、2005年の夏は高温が続き、南限種の本種の多くはこの夏が越せなかった。その後も資源は回復せず、一網で数尾となり、今では1シーズンで数尾となった。網にかかった本種は宍道湖漁協が買い取り、水産技術センターで、卵をとり放流しているが、回復の兆しが見えない。

### 概要

腹鰭は胸鰭より後方の腹位にあり脂鰭を持つサケ目の魚で、触るとキュウリのような独特のにおいをするキュウリウオ亜目に属する。自然分布域はロシア沿海州・サハリン・南千島から日本海側は宍道湖まで、太平洋岸は東京湾まで。主に沿岸や河川下流域等汽水域に生息するが、淡水域にもよく入り陸封化しやすい。成長のため降海する個体や一生を淡水で過ごす個体等多様性がある。産卵期は、川の水温が約6℃になることで、宍道湖では1-3月。日中に河口付近に集まった産卵群は、日没後川を遡上し、下流の水深20-30cmの砂礫底で産卵。中には川や湖岸の水草に産むものもある。卵は反転した付着膜で他物に付着する。

#### 参考文献

平塚純一・桑原弘道・桑原正樹ほか(未発表)本庄マス網調査1995-2017年。  
平塚純一・桑原弘道ほか(未発表)宍道湖マス網調査1995-2004年。  
細谷和海(2013)キュウリウオ科、中防徹次(編)日本産魚類検索全種の同定第三版:358-359。東海大学出版会、神奈川。  
桑原弘道(未発表)宍道湖マス網調査 2013-2025年。  
宮地傳三郎・川那部浩・哉水野信彦(1983)原色日本淡水魚図鑑:104-106。保育社、大阪。

卵径約1mm。受精後11日(水温16℃)-38日(7℃)で孵化する。陸封していない孵化した仔魚は主に夜、海や湖に降り、岸辺でワムシや藻類を食べ成長する。幼魚期以降はミジンコ、ユスリカの幼虫、イサザアミ等主に小型の浮遊動物を捕食する。満1年で6-11cmになり成熟し、多くは卵を産んで一生を終える。

### 県内での生息地域・生息環境

自然分布では、宍道湖、中海、並びにその流入・流出河川に生息。上田常一著山陰の動物誌によると、大正年代までの大橋川浚渫以前は中海にはたくさんいたが、宍道湖にはあまりいなかったようだ。夏場の表層水温が30℃を越す日が何日も続く宍道湖・中海では、暑さを避け、水深のある湖底に移動しようと思っても低層には酸素がなく、死を待つのみ。川を遡上し夏を乗り越え生き延びたものが、命をつないでいると思われる。

### 存続を脅かす原因

夏場の高水温。川に避難するとき、妨げとなる堰などの河川改修。  
(執筆: 桑原 弘道)

汽水・淡水魚類

## 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

サケ目サケ科

# ゴギ

*Salvelinus leucomaenis imbricus* Jordan and McGregor, 1925

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
-	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

撮影者(提供者): 島根県立宍道湖自然館

島根県固有評価

基準標本産地

環境省カテゴリー

絶滅危惧Ⅱ類(VU)



### 選定理由

中国山地を流れる一部の河川にのみ分布し、最上流域に生息する。開発や河川改修、自然林伐採などによる生息環境の荒廃で生息数が減少している。

### 概要

全長20-30cm前後だが、近年は30cmに達するものはまれである。他のイワナの亜種とは異なり、背部に見られる虫食い状の白色斑が吻端まで存在するのが本亜種の特徴である。本亜種は、世界のイワナ属魚類の中でもっとも南方に分布するもののひとつであり、氷期の遺存的な存在だと考えられる。水質が良好で、夏でも水温が20℃(多くは15℃以下)を超えない河川の上流域に生息し、おもに昆虫類や小動物を捕食している。繁殖期は10月下旬から11月中旬で、メスが川底に産卵床を掘り、その中に産卵する。ふ化した仔魚は翌春まで産卵床内にとどまり、腹部の卵黄を吸収して発育する。本亜種は稚魚期から障害物や岩陰に潜む性質が強く、野外ではなかなか発見しづらい。

#### 参考文献

山口勝秀(2015)改訂しまねレッドデータブック2014動物編:84。島根県環境生活部自然環境課、島根。

### 県内での生息地域・生息環境

県内では斐伊川水系から高津川水系まで分布するが、どの生息域でも生息数は減少傾向にあると思われる。近年、本亜種の生息域に別亜種ニッコウイワナの生息が確認されており、亜種間雑種形成による遺伝的独自性の喪失、遺伝子汚染が心配される。また、本亜種の生息域にヤマメなどのサケ科魚類を移入すると、競合によって本亜種が減少する可能性がある。近縁種、競合種の移入は厳に慎まなければならない。

### 存続を脅かす原因

河川改修や構造物の建設。水質汚染。伐採による広葉樹の減少。近縁種の移入による遺伝的独自性の喪失。競合する魚類の移入。釣りなど捕獲による採集圧。

(執筆: 山口 勝秀)

絶滅野生絶滅

絶滅危惧Ⅰ類

絶滅危惧Ⅱ類

準絶滅危惧

情報不足

## 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

トゲウオ目トゲウオ科

# ニホンイトヨ

*Gasterosteus nipponicus* Higuchi, Sakai and Goto, 2014

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
—	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

絶滅のおそれのある地域個体群(LP)(本州)

撮影者(提供者): 島根県立宍道湖自然館



### 選定理由

北方系魚種であり、県内は南限域に近い。宍道湖・中海水域以外ではきわめてまれとなり、当水域においても減少がさらに著しくなっている。

### 概要

本種は、背びれに3本と腹鱗に1本の鋭い棘をもち、体側に連続した大きなうろこ(鱗板)が並ぶ。従来、イトヨと称されていたものが、日本海系イトヨと太平洋系イトヨ、太平洋系陸封型イトヨに分類され、さらに日本海系イトヨがニホンイトヨとして記載された。本種の分布は、北海道から長崎県にかけての日本海側、北海道から千葉県銚子付近までの太平洋沿岸、北海道オホーツク海沿岸で、国外ではサハラリヤ千島列島、朝鮮半島東岸の日本海をとりまく各地である。産卵期は春で、成魚は河川を遡上し、流れの緩やかな水草帯で産卵する。産卵生態はユニークで、赤と青の婚姻色を出たオスが水草などでトンネル状の巣を作り、メスを誘って産卵させ放精する。その後、オスは卵と孵化仔魚を保護する。水生昆虫や小型の甲殻類などを食べる。

### 参考文献

細谷和海(2018)中坊徹次(編・監修)小学館の図鑑Z日本魚類館〜精緻な写真と美しい解説〜:182-183.小学館,東京.  
細谷和海(2019)細谷和海(編・監修)山溪ハンディ図鑑15増補改訂日本の淡水魚:296.山と溪谷社,東京.  
中野浩史(2015)改訂しまねレッドデータブック2014動物編:84.島根県環境生活部自然環境課,島根.

### 県内での生息地域・生息環境

かつては、産卵期の春に、全県下の河川の下流域や水田の用水路に普通に見られたが、戦後の高度経済成長期を境にして激減した。宍道湖・中海水域は一時の絶滅状態の時期を経て、生息数は徐々に回復していた。産卵遡上前の3月に、当水域に張られた小型定置網において稀に漁獲されることがある。前回の改訂時、ほとんど漁獲されなくなったとしたが、さらに漁獲できなくなりつつあり、1度も漁獲されない年もある。

### 存続を脅かす原因

水質と河川改修に伴う生息環境の悪化。産卵場所と巣の材料となる水生植物の減少。生息域における夏季の高水温。

(執筆:佐々木 興)

## 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

スズキ目ケツギョ科

# オヤニラミ

*Coreoperca kawamebari* (Temminck and Shlegel, 1843)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
—	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

絶滅危惧ⅠB類(EN)

撮影者(提供者): 島根県立宍道湖自然館



### 選定理由

河川改修や水の汚れによる環境破壊により、生息域を狭められており、近い将来の絶滅も危惧される。

### 概要

全長は最大で13cmとされているが、多くの個体が10cm前後の大きさである。鰓蓋には暗朱色の線が放射状に伸び、ヨツメという地方名が示すように、その後端に眼状斑がある。体側には6-7本の横縞がある。清涼で、流れが緩やかな河川の中・下流域に生息する。砂礫底の単調な河床よりも、大小の石が転がっている場所を好む。肉食性で、エビや水生昆虫などを捕食する。産卵期は4月下旬から9月頃とされるが、産卵は5-6月の時期に集中する。メスは、ヨシやツルヨシなどの水生植物、倒れ込んでいるササの茎などに、およそ100個の卵を産み付ける。孵化するまでの間、オスは外敵を追い払ったり、新鮮な水を卵に送ったりするなど、かいがいしく卵を保護する。国内では京都府桂川水系(保津川)、由良川以西の本州や四国東北部、九州北部の限られた河川に、国外では朝鮮半島に生息している。

### 参考文献

中野浩史(2015)改訂しまねレッドデータブック2014動物編:85.島根県環境生活部自然環境課,島根.

### 県内での生息地域・生息環境

島根県では高津川水系および江の川水系の本流や限られた支流にのみ生息している。本種を天然記念物に指定して保護活動を行っている自治体もある。

### 存続を脅かす原因

河川改修などによる生息環境の悪化や産卵床となる水生植物の減少。また、観賞魚として乱獲されるおそれがある。

(執筆:中野 浩史)

## 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

スズキ目ハゼ科

# ルリヨシノボリ

*Rhinogobius mizunoi* Suzuki, Shibukawa and Aizawa, 2017

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
—	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—

撮影者(提供者): 島根県立宍道湖自然館



汽水・淡水魚類

絶滅野生絶滅

絶滅危惧Ⅰ類

絶滅危惧Ⅱ類

準絶滅危惧

情報不足

### 選定理由

県内において本種の生息が確認されているのは数カ所、近年、いづれも確認できないか、確認できたとしてもわずかしかない。緊急性は高いと判断し、絶滅危惧Ⅱ類から変更した。

### 概要

ヨシノボリの仲間は、形態、生態の両面で変異性に富み、現在全国の河川・湖沼に生息するものは10種以上に分類されている。県内には、両側回遊性のものが5種と、河川陸封型のものが1種生息している。ヨシノボリの中では大型で全長7-10cm、時に12cmに達するものもある。生時に頬に美しいルリ色の小さな斑点が散在する。しかし、標本では、そのルリ色斑は消失するので、尾鰭基部にある太い八字状の濃色斑などが手がかりとなる。北海道から九州にかけての日本全国の小・中河川の中・上流域に生息し、早瀬から淵頭にかけた急流部に生息していることが多い。まれに湖沼に陸封されている個体群もみられる。雑食性で、付着藻類や小型の水生昆虫をおもな餌としている。西日本での産

### 参考文献

藤田朝彦 (2019) 細谷和海 (編・監修) 山深ハンディ図鑑15増補改訂日本の淡水魚: 458-459. 山と溪谷社. 東京.  
桑原友春・寺岡誠二・中畑勝見 (2021) 島根県東部におけるルリヨシノボリおよびヤマトヌマエビの生息確認調査. 2020年度ヒザキグリーン財団環境修復プロジェクト報告書: 33-41.  
山口勝秀 (2015) 改訂しまねレッドデータブック2014動物編: 89. 島根県環境生活部自然環境課. 島根.

卵は5-7月で、オスが半ば砂に埋まった石の下に産卵室をつくり、メスが天井面に卵を産みつける。県内では、日本海に注ぐ河川勾配が大きく、水量の豊かな小・中規模河川に生息しているほか、堰止め湖に陸封された個体群も確認されている。

### 県内での生息地域・生息環境

県内中東部の河川のほか、堰止め湖でも確認されている。また、県西部の河川においても生息が確認されている。

### 存続を脅かす原因

河川改修などによる生息環境の悪化、湖沼においてはオオクチバスの放流など。またダムの建設に伴う生息環境の減少など。

### 特記事項

これまで和名だけ確定し、学名は *Rhinogobius* sp.CO とされていたが、鈴木らにより2017年に本種の学名が確定している。

(執筆者: 佐々木 興)

## 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

ヤツメウナギ目 ヤツメウナギ科

# ミナミスナヤツメ

*Lethenteron hattai* Iwata, Sakai and Goto, 2024

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
—	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—

撮影者(提供者): 桑原弘道



### 選定理由

生息環境が限られており、そこで洪水ができれば一瞬で生息場所が奪われる。砂底に生息しており、河川改修が始まって逃げ出すことが遅れ、命を落とすことになる。

### 概要

本種の口は吸盤状で顎がなく、魚類より前の脊椎動物の最も古いタイプの無顎上綱に属し円口類などとも呼ばれている。鰓蓋はなく、体側の眼の後ろに鰓孔が7つ並び、眼と合わせて8つになるのでヤツメ(八つ目)と呼ばれる。スナヤツメ類は背鰭と尾鰭が淡色で、他のヤツメウナギ類と区別される。2024年スナヤツメがウチフスナヤツメ、キタスナヤツメ、ミナミスナヤツメの3種に分かれた。ウチフスナヤツメは、尾鰭が団扇状で、口孔の歯が丸いことで、尾鰭が菱形で口孔の歯が三角形の他の2種と区別され、本種は各鰓孔間の下側に感圧群と呼ばれる点列が並び、感圧群がないキタヤツメと区別される。本種は、本州、四国、九州、朝鮮半島南部に分布し、滋賀県以東では北方種と混在する。成魚の全長は15-25cmで、水の澄んだ流れの緩やかな、河川中流部や浅い細流の砂泥底などに生息し、一生を淡水で過ごし海には降らない。産卵期は、雪解けのおさまる4-6月。産卵場は流れの緩い中流の砂礫底で、数日

### 参考文献

桑原友春 (2015) 改訂しまねレッドデータブック2014動物編: 86. 島根県環境生活部自然環境課. 島根.  
京都大学・水産大学校 (2024) 新種 ウチフスナヤツメとミナミスナヤツメを報告. [https://www.fra.go.jp/home/kenkyushokai/press/pr2024/files/20241211\\_letthenteron.pdf](https://www.fra.go.jp/home/kenkyushokai/press/pr2024/files/20241211_letthenteron.pdf) (2025.9.30参照)  
松原喜代松 (1973) 魚類学 (下): 346-347. 恒星社厚生閣. 東京.  
宮地傳三郎・川那部浩哉・水野信彦 (1983) 原色日本淡水魚図鑑: 57. 保育社. 大阪.

にわたり何回かに分けておこなわれる。卵は1mm強の粘着卵で小石に付着し、8日ほどで孵化し、アンモシーテス幼生となる。幼生は目が皮の下に隠れており、川底に潜り、夜活動し、ロート状の口で有機物等を食べて大きくなり、数年後15-20cmになった秋、変態し成体となる。変態後も夜間は遊泳もするが、日中は浅い泥中に潜り、全く餌を摂らず消化管も退化し、春を待つ。そして春になると産卵し死んでいく。幼生の期間は普通4年といわれているが、栄養状態等でその期間は長くなったり短くなったりする。

### 県内での生息地域・生息環境

県内大型河川の流れの緩やかな中・上流域、その支流、河川につながる農業用水路等の砂底や砂泥底に生息。特に水がきれい細砂の上に落葉の分解物などがあるところを好む。

### 存続を脅かす原因

一生を通じ、川の砂泥底に潜伏して数年の間過ごすので、河川改修工事などで掘り起こされたり、上から石を落とされたりすると生き残るのは難しい。近年は大雨など自然災害の頻度も増した。そこで洪水がおこれば砂ごと流され、命が残っても一瞬で生息場所が奪われる。成長が遅く産卵するまでの年数もかかるので、一度数を減らすとよい環境があっても増えにくい。

(執筆者: 桑原 弘道)

## 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

サケ目サケ科

# サクラマス

*Oncorhynchus masou masou* (Brevoort, 1856)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
—	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

準絶滅危惧 (NT)

撮影者(提供者): 島根県立宍道湖自然館



### 選定理由

本種は、ヤマメ（河川残留型）の降海したもので、県内はヤマメの自然分布の南方に位置し、もともと降海する割合は北日本に比べ少ない。近年はさらに降海する個体が減少している。

### 概要

全長40—60cm。先に述べたヤマメが降海したもので、パーマーク（楕円形の斑紋）が消失して全体が銀白色となり、背びれの先が黒くなる〔銀化（ギンケ）またはスモルト〕。河川の上流域で生まれてから、2—3年目の春に降海するものが多い。降海後は近海でオキアミや小魚などを食べ、翌年の春に40—60cmに育って河川を遡上し、その秋にヤマメに混じって産卵し死亡する。北海道・東北・箱根以東の関東・北陸・山陰・九州の瀬戸内海に注がない河川に分布する。それ以外の地域には、体側に朱点の散在する近縁のサツキマス（アマゴ）の分布域となる。国外では、樺太・朝鮮半島の東側・台湾に分布する。

### 参考文献

藤岡康弘（2018）中坊徹次（編・監修）小学館の図鑑Z日本魚類館～精緻な写真と美しい解説～：140.小学館、東京。  
山口勝秀（2015）改訂しまねレッドデータブック2014動物編:87.島根県環境生活部自然環境課、島根。

### 県内での生息地域・生息環境

本県では、沿岸の定置網にまれに入ることがある程度で、その数は少ない。宍道湖・中海水域では30年ほど前までは、1投の網で年間10尾程度獲れていたが、近年はほとんど漁獲されない。

### 存続を脅かす原因

森林伐採や砂防ダムおよび河川改修工事によるヤマメの生息環境の悪化があげられる。流域に設けられた魚道が十分に機能しないことや、各種のダムや堰堤によって、海との繋がりが断ち切られていることも原因である。

（執筆者：佐々木 興）

## 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

トゲウオ目ヨウジウオ科

# ヨウジウオ

*Syngnathus shlegeli* Kaup, 1856

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
—	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—

島根県立宍道湖自然館



### 選定理由

中海を中心に生息しており、定置網などで時折混獲されているが、近年確認される機会が減少している。

### 概要

全長30cmほど。日本産ヨウジウオ類では大型の部類。体は大輪でおおわれて、吻は長い筒状で腹鰭はない。体色は褐色で不規則な模様のあるものや緑緑色のものなど変異に富む。中海で同所的に生息するガンテンイシヨウジは吻が短いことなどから区別できる。北海道以南の日本各地、朝鮮半島、中国、台湾、東シナ海、南シナ海、トンキン湾、沿海州の沿岸域の浅い内湾に生息する。アマモ場に多く生息している。底生性だが、胸鰭と背鰭をせわしなく動かして浮遊している。プランクトンを吸い込むようにして食べる。メスがオスの育児嚢に産卵してオスがふ化するまで育てる。産卵期は、3月中旬から6月頃で、全長10mmで産出されるが遊泳能力はきわめて低く、稚魚は流れ藻とともに採集されることが多い。

### 参考文献

山口勝秀（2015）改訂しまねレッドデータブック2014動物編:87.島根県環境生活部自然環境課、島根。

### 県内での生息地域・生息環境

中海を中心に大橋川や宍道湖東岸のアマモ場で確認されている。2000年頃から中海での定置網による漁獲数が減少傾向になり、2005年以降著しく減少している。近年は中海におけるアマモ場の位置が変化し、生息数の実態が不明瞭になっている。近縁のガンテンイシヨウジは、太平洋沿岸に多く分布しているが、近年の水温上昇の影響により、宍道湖の全域と大橋川、中海で普通に見ることができず。ヨウジウオとガンテンイシヨウジともに宍道湖西岸の塩分濃度の低い水域でも見られることがある。

### 存続を脅かす原因

アマモ場の消失など環境の変化による生息環境の悪化。

（執筆者：佐々木 興）

## 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

トゲウオ目 ヨウジウオ科

### サンゴタツ

*Hippocampus mohnikei* Bleeker, 1853

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
—	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

撮影者(提供者): 桑原弘道

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—



汽水・淡水魚類

絶滅野生絶滅

絶滅危惧Ⅰ類

絶滅危惧Ⅱ類

準絶滅危惧

情報不足

#### 選定理由

汽水域の岸边という限られた場所に生息している。

#### 概要

タツノオトシゴ属の中では小型で全長5—8cmほど。頂冠がほとんど目立たず、吻が短く、躯幹部背側に3個の黒色斑がない、躯幹輪数は11などで、本属の他の種と区別できる。腹鰭はなく、筒状の吻で藻場にやってくる仔魚や小型甲殻類など動物プランクトンを水と一緒に吸い込んで食べる。体色は黒褐色や淡黄褐色、まだら模様など変化に富む。北海道以南九州西部までの日本、国外では朝鮮半島南部、中国の東シナ海、南シナ海沿岸などの内湾の藻場に多く、汽水域にも進入する。本州中部の産卵期は、春～秋、雌が雄の育児嚢内に産卵する。卵径1—1.5mm。孵化仔魚は3.5mm。受精後1週間ほどで、雄は海藻などに尾を巻き付け踏ん張り、育児嚢で約8mmに育った仔魚を約90尾産み出す。産み出された仔魚は流れ藻などに付き成長する。

#### 参考文献

平塚純一・桑原弘道・桑原正樹ほか(未発表)本庄マス網調査 1995-2017年。  
平塚純一・桑原弘道ほか(未発表)宍道湖マス網調査 1995-2004年。  
桑原弘道(未発表)宍道湖マス網調査 2013-2025年。  
瀬能宏(2013)ヨウジウオ科。中坊徹次(編)日本産魚類検索全種の同定第三版:615-633。東海大学出版会。神奈川。  
山口勝秀(2015)改訂しまねレッドデータブック2014動物編:88。島根県環境生活部自然環境課。島根。

#### 県内での生息地域・生息環境

中海の岩場や岸壁に生えている海藻についていることが多い。ヨウジウオ類と異なり、砂場のアマモにはあまりついていない。大橋川など宍道湖・中海をつなぐ川にも生息する。宍道湖東部では以前よりよく見かけるようになり、西部でも見かけるようになった。

図鑑では内湾に生息と書いてあるが、境水道や美保湾ではタツノオトシゴはいるが、本種は確認していない。

#### 存続を脅かす原因

主な生息地である中海で強風が吹いた後青潮がおきると、貧酸素層が岸壁に打ち寄せ、遊泳能力の弱い本種の多くは死んでいく。海藻も死滅するので、復活するまでは、そこにすめない。

(執筆: 桑原 弘道)

## 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

ダツ目 サヨリ科

### クルマサヨリ

*Hyporhamphus intermedius* (Cantor, 1842)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
—	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

桑原弘道

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

準絶滅危惧(NT)



#### 選定理由

生活圏が汽水域という限られた水域。夏場に続く高水温。鳥、魚食魚などによる食害。

#### 概要

全長15—20cm、近種のサヨリに似ているが、①サヨリよりも下顎は長く、上顎先端から鰓蓋までの頭長より下顎長が長い。サヨリは頭長のほうが長い。②下顎の先端下面は黒色。サヨリは赤色。この2点で区別できる。本州、四国、九州の内湾沿岸部、汽水域から河川の下流域、汽水湖に群れて生息する。国外では台湾、朝鮮半島、中国大陸、ベトナムにも分布。汽水性の魚で、サヨリのように河川と海域を移動するようなことはなく、汽水内を移動し、淡水域にも進入する。産卵期は中海・宍道湖では4—6月、雌雄が群れを作り泳ぎながらアマモ等の水草に産卵する。卵は球形で直径1.5mm弱。太い1本と反対側に細い3—4本の付着糸があり、これで1個ずつ水草に絡みつく。受精後15—16日(水温20-25℃)で孵化。孵化仔魚は4mm。孵化後10日ごろから下顎が伸

#### 参考文献

藍澤正宏・土居内龍(2013)サヨリ科。中坊徹次(編)日本産魚類検索全種の同定第三版:651-654。東海大学出版会。神奈川。  
平塚純一・桑原弘道・桑原正樹ほか(未発表)本庄マス網調査1995-2017年。  
平塚純一・桑原弘道ほか(未発表)宍道湖マス網調査 1995-2004年。  
桑原弘道(未発表)宍道湖マス網調査2013-2025年。  
田久和剛史(2015)改訂しまねレッドデータブック2014動物編:85。島根県環境生活部自然環境課。島根。

びはじめ、1月たつと親と同じような形になる。幼魚期は、藻場や岸壁の表層を群れて泳ぎ、5—10月にかけては淡水域にも遡上するが、水温が下がると汽水域に留まる。15cmまでは主に藻などについている甲殻類等の浮遊動物や小魚の稚魚も食べるが、成長するとほとんど浮遊植物食になる。

#### 県内での生息地域・生息環境

本種は県内の大型河川感潮域、宍道湖中海並びにその流入流出河川、神西湖など汽水域に生息する。近年宍道湖やその流入流出河川などでは水草が増え、産卵や稚魚の隠れ家として利用され、この周辺では数を増やしているが、限られた環境でしか生きられないので、これからも注視が必要である。

#### 存続を脅かす原因

汽水域という限られた環境の表層を遊泳する魚で、夏場の表層の高水温は、生存を脅かしている。表層を遊泳するので鳥や魚食魚などにも襲われやすい。

(執筆: 桑原 弘道)

## 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

スズキ目カジカ科

# カジカ大卵型

*Cottus pollux* Günther, 1873

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
—	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

撮影者(提供者):佐藤仁志

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

準絶滅危惧(NT)



### 選定理由

本種は、河川の水質や水生生物の生息環境が良好に保全されていることを示す代表的な種であるが、すべての生息地において河川の生息環境が悪化し、個体数が減少している。

### 概要

カジカ *Cottus pollux* はカジカ科に属する日本固有種で、生活型や遺伝的に異なる3つのタイプが知られており、海に下る小卵型・中卵型と河川陸封性の大卵型がいる。また、琵琶湖にはウツセミカジカと呼ばれる小卵型の湖沼陸封個体群が生息する。大卵型は河川の上流部に生息し、海に下ることはない。県内には、大卵型と中卵型が生息しており、大卵型は全長7-9cmで時に12cmに達することもある。瀬の砂礫底や礫底に生息する底生魚で、体色は周囲の環境や体調によって異なり、灰褐色から暗褐色まで変化に富んでいる。体側に、4-5個の暗色の斑紋がある。体形はカワヨシノボリなどのハゼ類に似るが、カジカ類にはう

ろがないことや、頭部側面に棘を有すること、胸鰭の鰭条が分岐しないことなどで区別できる。また、腹鰭が2つに分かれており、ヨシノボリのなかまのように合一して吸盤状になることはない。水生昆虫や小型甲殻類、時には小魚も食べる。産卵は、3月中旬から6月中旬で、川の瀬の石の下面に卵を産みつける。金沢名物のゴリ料理は、本種が用いられている。

### 県内での生息地域・生息環境

県内において生息が確認されている河川は、高津川、浜田川、江の川、神戸川、斐伊川、飯梨川などの大型の河川である。多くの場合、中下流に両側回遊性のカジカ中卵型が生息している。

### 存続を脅かす原因

河川改修等に伴う生息環境の悪化や減少、河川横断構造物による移動阻害など。

(執筆: 佐藤 仁志)

### 参考文献

川那部浩哉・水野信彦編(2001)日本の淡水魚。719pp。山と溪谷社、東京。  
宗原弘幸編(2011)カジカ類の多様性: 適応と進化。276pp。東海大学出版会、神奈川。  
中坊徹次・甲斐嘉晃(2013)カジカ科。中坊徹次(編)日本産魚類検索全種の同定第三版: 1160-1188。東海大学出版会、東京。  
菅野一輝・乾 隆帝・白井厚太郎・鬼倉徳雄・小山彰彦・澤 海人・若林瑞希(2019)高梁川水系のカジカ種群の分布と遺伝的・形態的・生態的特徴。日本生物地理学会会報。74: 25-31。

## 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

スズキ目ドンコ科

# イシドンコ

*Odontobutis hikimius* Iwata and Sakai, 2002

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
—	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

撮影者(提供者):佐藤仁志

島根県固有評価

基準標本産地

環境省カテゴリー

絶滅危惧Ⅱ類(VU)



### 選定理由

生息域は局所的で、生息域での繁殖は確認されているが、生息数はあまり多くない。鑑賞魚として乱獲されるおそれがある。

### 概要

高津川水系匹見川で採集された個体に基づき、2002年に新種として記載された。外部形態はドンコによく似るが、遺伝的に大きく離れているほか、後鼻孔から眼窩後方に伸びる孔器列とえら蓋にある孔器列に違いが見られることや、うろこが小さく数が多いなどの違いがある。また、下顎下面の斑点の黄色味が強く、体高が低い傾向にある。ドンコが流れの比較的緩やかな場所を好むのに対し、本種は流れが速く石がごろごろしているような場所によく見られ、川底の石の隙間に身を潜めていることが多い。5-7月の産卵期になると、オスはふだん隠れがにして

いる石の下にある砂や小石を口で掘り出して産卵室を作る。メスは産卵室の天井部分に産卵することが多いが、壁面にまでおよぶこともある。卵は楕円形で、付着糸により産卵基質に付着する。産卵・放精後、オスはすぐにメスを追い出す。その後オスはふ化するまで卵のそばで胸びれを使って卵に新鮮な水を送り、卵に酸素を供給する。

### 県内での生息地域・生息環境

高津川水系とその周辺にしか生息しておらず、きわめて局所的。匹見川がおもな生息地で、高津川本流での生息数は少ない。

### 存続を脅かす原因

河川改修などによる生息環境の悪化やドンコとの交雑などが危惧される。また、観賞魚として乱獲されるおそれがある。

(執筆: 佐藤 仁志)

### 参考文献

明仁・坂本勝一・池田祐二・岩田明久(2000)ハゼ亜目。中坊徹次(編)日本産魚類検索第二版: 1139-1310。東海大学出版会、東京。  
Iwata,A.and H.Sakai(2002) Odontobutis hikimius n.sp.:A New Freshwater Goby from Japan,with a Key to Species of the Genus, Copeia, 2002 (1): 104-110。  
岩田明久(1999) 遺伝的に異なるドンコ2グループの高津川水系およびその近隣河川における分布。魚類学雑誌。46(2): 109-114。  
Sakai,H. A.Iwata and S.R.Jeon(1993) Genetic evidence supporting the three distinct species in the genus Odontobutis (Gobiidae) from Japan and Korea. Japan.J.Ichthyol. 40: 61-64。  
酒井治己・田中善喜・辻井浩志・岩田明久・池田 至(1999) 遺伝的に著しく異なるドンコ2グループの高津川水系およびその近隣河川における分布。魚類学雑誌。46: 109-114。

## 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

スズキ目ハゼ科

# シンジコハゼ

*Gymnogobius taranetzi* (Pinchuk, 1978)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
—	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

絶滅危惧Ⅱ類(VU)

撮影者(提供者): 島根県立宍道湖自然館



### 選定理由

本種は、主に汽水域に生息しており宍道湖以外の水域でも確認されているが、その確認場所および生息数は少ない。宍道湖では近縁種であるピリンゴが優先しつつあり、本種の生息域が減少傾向にある。

### 概要

全長メス6cm、オス5.5cm。中海に多い近縁のピリンゴとは酷似するが、メスの婚姻色と頭部の感覚器官の形状で識別できる。婚姻色は本種が体側に6-7本のあざやかな橙色の横斑が現れるのに対してピリンゴの場合はそれがない。また、頭部の感覚器官では、本種が感覚管の両端2個の感覚孔が開いているのに対して、ピリンゴでは管が連結して孔は3個開いている。国内では、富山県、石川県、他にロシア沿海州や朝鮮半島東海岸からも確認されている。

### 県内での生息地域・生息環境

宍道湖での産卵は3月から4月上旬にかけて、オスが湖底に巣穴を掘ってメスを誘って行われる。孵化した仔魚は、わんどや船着場などの風波

#### 参考文献

原田慈雄(2018) 中坊徹次(編) 小学館の図鑑Z日本魚類館〜精緻な写真と美しい解説〜: 404. 小学館, 東京.  
山口勝秀(2015) 改訂しまねレッドデータブック2014動物編: 90. 島根県環境生活部自然環境課, 島根.

を避ける場所に集まって浮遊生活をおくる。成長は早く、夏過ぎには親魚サイズにまで達し、秋の深まりとともに生殖巣が発達してくる。雑食性で稚魚、成魚ともにイサザミ類などの浮遊生物の他、ユスリカの幼虫・ゴカイ類・コブツムシなどの底生生物、藻類も食べる。2000年頃までは、宍道湖全域で確認されたが、2009年以降は生息数が減少している。現在は、宍道湖西岸と周辺の水路、安来市の中海流入河川の水路で見られる。益田市でも生息が確認されていたが、近年見られなくなり絶滅した可能性が高い。また、松江市近郊の溜池にも生息し、陸封個体群の可能性が高い。

### 存続を脅かす原因

わんどや旧来の船着場などの、仔稚魚の生育する場所を保全することが必要。

### 特記事項

最近の研究では、ロシアや韓国産の*Gymnogobius taranetzi*と国内に分布するシンジコハゼとは遺伝的に分化が認められるとしている。

(執筆: 佐々木 興)

## 準絶滅危惧 (NT)

ウナギ目ウナギ科

# ニホンウナギ

*Anguilla japonica* Temminck and Schlegel, 1847

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
—	—	準絶滅危惧 (NT)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

絶滅危惧ⅠB類(EN)

撮影者(提供者): 島根県立宍道湖自然館



### 選定理由

養殖用としてのシラスウナギ乱獲や、河川構造物の建設、河川改修などによる生息環境の悪化などにより、近年全国的に河川内に生息する個体数が減少している。

### 概要

全長は通常50-60cm、最大で1mほどになる。国内では沖縄以北の九州、四国、本州とその周辺諸島、北海道太平洋側に広く生息し、国外ではフィリピン北部、台湾、中国、朝鮮半島に生息する。河川内の下流から上流域まで生息し、甲殻類や魚類など幅広く摂食する。成熟すると降下回遊を行い、日本の南方マリアナ諸島周辺海域で産卵する。

#### 参考文献

安藤重敏(2023) レッドデータブックとっとり第3版2022-鳥取県の絶滅のおそれのある野生動植物: 78. 鳥取県生活環境部緑豊かな自然課, 鳥取.  
波戸岡清峰(2013) ウナギ科, 中坊徹次(編) 日本産魚類検索全種の同定第三版: 240. 東海大学出版会, 神奈川.  
藤田朝彦(2019) 細谷和海(編) 山溪ハンディ図鑑15増補改訂日本の淡水魚: 30-33. 山と溪谷社, 東京.  
黒木真里(2018) 中坊徹次(編) 小学館の図鑑Z日本魚類館〜精緻な写真と美しい解説〜: 76-77. 小学館, 東京.  
山口勝秀(1999) 島根県の淡水魚(既報の整理). ホンザキグリーン財団研究報告, (3): 1-38.

### 県内での生息地域・生息環境

大小問わず県内全域の河川に生息し、宍道湖などの汽水湖や汽水域にも生息する。日中は岩などの隙間に隠れ、夜になると遊泳しながら活発に摂餌する。

### 存続を脅かす原因

水産重要種であり、国内だけでなく生息域全体で養殖用として稚魚が乱獲されることによる。また、河川内においても河床の硬質化、コンクリート化による生息場所の減少がさらに追い打ちをかけている。

(執筆: 佐々木 興)

## 準絶滅危惧 (NT)

コイ目コイ科

# ヤリタナゴ

*Tanakia lanceolata* (Temminck and Schlegel, 1846)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
—	—	準絶滅危惧 (NT)

撮影者(提供者): 島根県立宍道湖自然館

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

準絶滅危惧(NT)



### ■ 選定理由

産卵母貝の減少、農業水路の改修などの影響により、近年急速に個体数が減少傾向にある。

### ■ 概要

体長は最大10cmほどになり、日本産タナゴ類の中では大型の方である。また体高は低い傾向があり、これが和名の由来になっている。本州、四国、九州の各地に生息し、河川中・下流、平野部の細流、農業水路など流れのある場所に生息する。1対の長い口ひげをもち、繁殖期のオスは青みがかった金属光沢を基調に赤紫色の混ざった複雑な婚姻色を呈する。イシガイ科のイシガイ、マツカサガイなど小型の淡水二枚貝を産卵母貝とする。また、斐伊川水系と江の川水系における本種は遺伝的な系統が異なることが示唆されているため、安易な移動による遺伝子汚染が懸念される。

#### ● 参考文献

細谷和海 (2013) コイ科、中坊徹次(編) 日本産魚類検索全種の同定第三版: 311. 東海大学出版会、神奈川。  
北村淳一 (2020) 日本のタナゴ生態・保全・文化と図鑑、223pp. 山と溪谷社、東京。  
武内啓明 (2018) 中坊徹次(編) 小学館の図鑑Z日本魚類館~精緻な写真と美しい解説~: 97. 小学館、東京。  
武内啓明 (2019) 細谷和海(編・監修) 山溪ハンディ図鑑15増補改訂日本の淡水魚: 58-59. 山と溪谷社、東京。

### ■ 県内での生息地域・生息環境

斐伊川水系、江の川水系の各河川およびそれに接続する農業水路などに広く生息する。

### ■ 存続を脅かす原因

河川改修や農業水路の改修に伴うコンクリート張りにより、イシガイなどの産卵母貝が減少したことによる影響。また外来種であるタイリクバラタナゴとの産卵母貝をめぐる競合など。

(執筆: 佐々木 興)

## 準絶滅危惧 (NT)

コイ目コイ科

# アブラボテ

*Tanakia limbata* (Temminck and Schlegel, 1846)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
—	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

撮影者(提供者): 島根県立宍道湖自然館

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

準絶滅危惧(NT)



### ■ 選定理由

県内では、中西部の一部の水域にのみ生息する。生息数も多くはない。

### ■ 概要

全長4-7cm。繁殖期は4-6月頃で、オスには追星と重油色と黒色を基調とした婚姻色があらわれる。メスでは腹部から産卵管が伸び、これを用いて淡水二枚貝の鰓内に産卵する。本種を含むタナゴ類の繁殖には、産卵母貝となるイシガイ目の二枚貝の生息が不可欠である。また、二枚貝の繁殖時には、ブロキディウム幼生が寄生する底生魚類の存在が不可欠で、本種が生息するためには多様な自然環境が必要である。また、貝から浮出した稚魚がくらせる水生植物などが繁茂する岸辺付近の環境も重要である。

#### ● 参考文献

北村淳一 (2020) 日本のタナゴ生態・保全・文化と図鑑、223pp. 山と溪谷社、東京。  
山口勝秀 (2015) 改訂しまねレッドデータブック2014動物編: 91. 島根県環境生活部自然環境課、島根。

### ■ 県内での生息地域・生息環境

県内中西部の限られた自然環境が良好な水域に生息する。

### ■ 存続を脅かす原因

河川改修や水路の改修、ヘドロの堆積や水質悪化などによる二枚貝の減少。

(執筆: 佐々木 興)

## 準絶滅危惧 (NT)

コイ目コイ科

# モツゴ

*Pseudorasbora parva* (Temminck and Schlegel, 1846)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
-	-	準絶滅危惧 (NT)

撮影者(提供者): 島根県立宍道湖自然館

島根県固有評価

-

環境省カテゴリー

-



### ■ 選定理由

かつては小ブナやメダカとともに身近な水辺で普通に見られ、広く親しまれてきた川魚である。しかし、現在では、ごく一部の水域を除くと激減状況にあることから、今回の改訂で、新規に選定した。

### 概要

日本全国に分布する全長8cmほどの小型の淡水魚である。吻端から尾鰭にかけて太い黒線が走る個体が多い。口ひげはなく、小さな受け口のところから多くの地方で、「クチボソ」とよばれている。産卵期は初夏で、オスが作った産卵床にメスをさそって産卵が行われる。その後はオスが留まって、産みこまれた卵を護る習性がある。食性の幅は広く、雑食性である。

#### ●参考文献

江田伸司・坂本明弘(1993) 隠岐の淡水魚類調査。倉敷市立自然史博物館研究報告。(8): 47-50。  
越川敏樹(1985) 宍道湖とその周辺水域の魚類。淡水魚。11: 10-14。  
細谷和海(2013) コイ科。中坊徹次(編) 日本産魚類検索全種の同定第三版: 322。東海大学出版会、神奈川。  
島根県(1979) 第2回自然環境保全基礎調査 河川調査報告書: 4-13。  
内山隆(2001) 川那部浩哉・水野信彦(編・監修) 山溪カラー名鑑改訂版日本の淡水魚: 302-305。山と溪谷社、東京。

### 県内での生息地域・生息環境

現在は、県東部の溜池とその周辺に比較的多く見られるが、その範囲は極めて狭い。その他の生息水域では著しい減少傾向にある。

### 存続を脅かす原因

主な生息場所である河川の緩流域・溜池・用水路などにおける改修工事による環境の変化がまずあげられる。その他、水質の悪化や外来魚の増加などその原因は多岐にわたる複合的なものである。

(執筆: 越川 敏樹)

汽水・淡水魚類

## 準絶滅危惧 (NT)

コイ目コイ科

# カワヒガイ

*Sarcocheilichthys variegatus* (Temminck and Schlegel, 1846)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
-	-	準絶滅危惧 (NT)

撮影者(提供者): 島根県立宍道湖自然館

島根県固有評価

-

環境省カテゴリー

準絶滅危惧(NT)



### ■ 選定理由

本県での生息域は限定的とされ、また詳細な生息域も特定できていない。生息確認ができていない場所においても個体数はあまり多くないと推測される。

### 概要

体長は約13-15cm。愛知県以西の本州太平洋側、山陽地方、九州北西部に生息し、日本海側では京都府、兵庫県、島根県の限られた水系で確認されている。河川中・下流域やこれに接続する水路などに生息する。体色は金属光沢のある灰色で、体側に1本の黒色縦帯があり所々に虫食い状の雲状黒色斑がある。各鰭は黄色を呈し、背鰭の鰭膜に黒色斑が発達する。繁殖期のオスは全体に黒みがかり、頬は桃色、目も橙色に染まる婚姻色を呈する。イシガイ、ササノハガイなど淡水二枚貝の外套膜内に直径5mmほどの大きな卵を産卵する。

#### ●参考文献

細谷和海(2013) コイ科。中坊徹次(編) 日本産魚類検索全種の同定第三版: 323。東海大学出版会、神奈川。  
細谷和海(2018) 中坊徹次(編) 小学館の図鑑Z日本魚類館~精緻な写真と美しい解説~: 107。小学館、東京。  
細谷和海(2019) 細谷和海(編・監修) 山溪ハンディ図鑑15増補改訂日本の淡水魚: 138-139。山と溪谷社、東京。

### 県内での生息地域・生息環境

斐伊川水系、江の川水系の中。下流部およびそれに連なる水路などに生息する。比較的流れがあり、特に砂底、砂礫底を好む。

### 存続を脅かす原因

タナゴ類と同様に、産卵母貝である淡水二枚貝の減少。

(執筆: 佐々木 興)

絶滅  
野生絶滅

絶滅危惧I類

絶滅危惧II類

準絶滅危惧

情報不足

## 準絶滅危惧 (NT)

コイ目コイ科

# ズナガニゴイ

*Hemibarbus longirostris* (Regan, 1908)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
—	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—

撮影者(提供者): 島根県立宍道湖自然館



### 選定理由

生息地域が限られ個体数も少ない。

### 概要

国内におけるニゴイの仲間には、本種とニゴイ、コウライニゴイの3種が知られている。本種は、ニゴイよりもさらに頭と吻が長く、体色は淡黄色で、背面と体側に褐色の斑紋と小褐色点が発散する。全長約20cmで、中流域の流れが緩やかな砂底を好み、底層近くを遊泳して時々砂に潜る。繁殖期は5-6月で、メスのほうがオスよりも尻びれが長くなり、産卵直前に水底の砂をかき混ぜる。カゲロウの幼虫などの水生昆虫をおもに食べる。近畿地方以西の本州の河川に不連続に分布している。

### 参考文献

川瀬成吾 (2019) 細谷和海 (編・監修) 山溪ハンディ図鑑15増補改訂日本の淡水魚: 152-153. 山と溪谷社, 東京.  
 山口勝秀 (2015) 改訂しまねレッドデータブック2014動物編: 91. 島根県環境生活部自然環境課, 島根.

### 県内での生息地域・生息環境

県中部の限られた河川でのみ生息が知られている。河底が岩、礫、砂と多彩に組み合わせられた清流を好む。

### 存続を脅かす原因

河川改修などによる生息環境の悪化や競合種の増加など。

(執筆者: 山口 勝秀)

## 準絶滅危惧 (NT)

コイ目ドジョウ科

# サンインコガタスジシマドジョウ

*Cobitis minamorii saninensis* Nakajima, 2012

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
—	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

絶滅危惧 I B類 (EN)

撮影者(提供者): 島根県立宍道湖自然館



### 選定理由

近年、シマドジョウ属の分類が整理しなおされ、分布域が山陰地方に限られていることから。

### 概要

従来、スジシマドジョウ小型種点小型 (*Cobitis* sp.2.subsp.3) と称されていたもの。全長5-7cmで、体はやや細長く、シマドジョウよりも小型である。体側の斑紋は雌雄で異なる。オスが線列型で、典型的なスジシマ型であるのに対し、メスは点列型か破線型で、シマドジョウの斑紋に似ている。平野部の河川の中・下流や農業用水路、浅所の砂泥底に棲む。砂泥底にひそむユスリカの幼虫などの水生昆虫やミミズなどを食べる。繁殖期は6-7月と考えられる。兵庫県の岸田川から本県の神戸川までの山陰地方に分布する。

### 参考文献

桑原友春・森永和希・中畑勝見 (2022) 斐伊川水系におけるサンインコガタスジシマドジョウの繁殖生態。2021年度ホシザキグリーン財団環境修復プロジェクト報告書: 1-11.  
 中島 淳 (2017) 日本のドジョウ形態・生態・文化と図鑑。223pp. 山と溪谷社, 東京.  
 中野浩史 (2015) 改訂しまねレッドデータブック2014動物編: 91. 島根県環境生活部自然環境課, 島根.

### 県内での生息地域・生息環境

県東部の平野部を流れる砂泥底の河川や用水路。

### 存続を脅かす原因

圃場整備や河川改修などによる生息環境の悪化。また、観賞魚として乱獲されるおそれがある。

(執筆者: 中野 浩史)

## 準絶滅危惧 (NT)

ナマズ目アカザ科

# アカザ

*Liobagrus reinii* Hilgendorf, 1878

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
—	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

撮影者(提供者): 島根県立宍道湖自然館

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

絶滅危惧Ⅱ類(VU)



### 選定理由

清流であることが本種の生息には重要だが、河床の硬質化など近年は生息環境の悪化に伴って姿を見なくなった河川も少なくない。

### 概要

全長7〜10cm。日本の淡水魚では珍しい赤色系の体色をもつ小型のナマズである。8本の口ひげがあり、鱗は棘状になっていて不用意に捕まえると刺される。日本固有種で、宮城県・秋田県以南の本州、四国、九州に分布する。近年、本種は遺伝的に二つの系統に分かれることが明らかになり、別種または別亜種に分かれる可能性もある。本県では同一水系内に混在している河川もあるが形態的特徴も未解明なため、安易な移動は厳に慎まなければならない。

#### 参考文献

藤田朝彦 (2018) 中坊徹次 (編) 小学館の図鑑Z日本魚類館〜精緻な写真と美しい解説〜: 120. 小学館, 東京.  
 藤田朝彦 (2019) 細谷和海 (編・監修) 山深ハンディ図鑑15増補改訂日本の淡水魚: 222-223. 山と溪谷社, 東京.  
 Nakagawa, H., S. Seki, T. Ishikawa, K. Watanabe (2016) Genetic population structure of the Japanese torrent catfish *Liobagrus reinii* (Amblycipitidae) inferred from mitochondrial cytochrome b variations. *Ichthyological Research*, 63(3): 333-346.  
 山口勝秀 (2015) 改訂しまねレッドデータブック2014動物編: 92. 島根県環境生活部自然課, 島根.

### 県内での生息地域・生息環境

中規模以上の河川の清流域に広く分布するが、もともとその分布密度は低い。

### 存続を脅かす原因

ダム・堰堤などの河川工事によって清流が減少し、本種の生息環境が失われてきたことによる。

(執筆者: 佐々木 興)

汽水・淡水魚類

## 準絶滅危惧 (NT)

ボラ目 ボラ科

# セスジボラ

*Chelon affinis* (Günther, 1861)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
—	—	準絶滅危惧 (NT)

撮影者(提供者): 桑原弘道

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—



### 選定理由

2010年までは、湖岸に立てば、波がない日なら大概水面を泳ぐ群れを見ることができた魚だったが、その後急に見かけなくなり、本庄や宍道湖のマス網にもほとんど入らなくなった。急激な減少の理由が定かでないことが一番の問題である。

### 概要

本州以南の日本全土、台湾、紅海、インド洋にかけての内湾や河口域に分布する。背鰭は2つに分かれ、腹鰭は第1背鰭より前にある。ボラに似るが、胸鰭の付根は、青くならない。ボラやメナダは、臀鰭が背鰭より、少し前にあるが、本種は背鰭と臀鰭が、上下同位置で相対する。第1背鰭前方の背面に1本の隆起した線があるので、この名がついた。西日本の産卵期は2〜3月、近海で産卵する。附着藻類や泥中の有機物を主に食べるが、ゴカイ等の底性動物も食べる。

#### 参考文献

平塚純一・桑原弘道・桑原正樹ほか (未発表) 本庄マス網調査1995-2017年.  
 平塚純一・桑原弘道ほか (未発表) 宍道湖マス網調査 1995-2004年.  
 川瀬成吾 (2015) 細谷和海 (編・監修) 山深ハンディ図鑑15日本の淡水魚: 18. 山と溪谷社, 東京.  
 桑原弘道 (未発表) 宍道湖マス網調査2013-2025年.  
 瀬能 宏 (2013) ボラ科, 中坊徹次 (編) 日本産魚類検索全種の同定第三版: 636-639. 東海大学出版会, 神奈川.

### 県内での生息地域・生息環境

汽水域に生息する魚で、中海や宍道湖、神西湖、並びにその周辺の水域等の表層を群れて泳ぐ。以前は宍道湖では春、遡上した稚魚の群れが、次第に成長していく姿を秋まで見られた。

### 存続を脅かす原因

あれだけたくさんいた魚が、短期間で激減した理由はよくわからない。表層を泳ぐ魚だが、南方系の魚なので、夏の高水温の影響は、他の魚より少ないと思われる。このころから増えてきたスズキやカワウなどの食害も考えられる。分解の進んだ生き物やちぎれ藻なども食べてくれる湖の掃除屋だが、漁業的価値はなく、これだけ減っても漁師から本種が減った話は聞かないが、食害が原因ならばは有用種が標的となる。そこらへんも注視しないといけない。

(執筆者: 桑原 弘道)

絶滅野生絶滅

絶滅危惧Ⅰ類

絶滅危惧Ⅱ類

準絶滅危惧

情報不足

## 準絶滅危惧 (NT)

スズキ目カジカ科

# アユカケ (カマキリ)

*Cottus kazika* Jordan and Starks, 1904

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
—	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

撮影者(提供者): 島根県立宍道湖自然館

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

絶滅危惧Ⅱ類(VU)



### 選定理由

かつては県内河川中流域に普通に見られたが、現在では生息域・生息数ともに減少している。

### 概要

全長20cm、灰褐色の地に3本の暗色鞍状斑がある。他のカジカ類同様、うろこはない。体型はハゼ類に似るが、腹鰭は吸盤状になっておらず分離している。河川中流域の瀬の礫底を好む。幼魚期はおもに水生昆虫を食べ、10cmを超えると小魚などを食べる。日本固有種で、本州の日本海側に多い。

#### 参考文献

細谷和海 (2019) 細谷和海 (編・監修) 山溪ハンディ図鑑15増補改訂日本の淡水魚: 378-379. 山と溪谷社, 東京.  
中坊徹次・甲斐嘉晃 (2013) カジカ科. 中坊徹次 (編) 日本産魚類検索全種の同定第三版: 1173. 東海大学出版会, 神奈川.  
山口勝秀 (2015) 改訂しまねレッドデータブック2014動物編: 92. 島根県環境生活部自然環境課, 島根.

### 県内での生息地域・生息環境

県内河川の中流域に生息するが、川を遡上する力は弱く、多くの河川では堰堤の存在により、本来の生息域ではない河口域に生息している場合が多い。江の川河口域では産卵場が確認されている。

### 存続を脅かす原因

生息に適した砂礫帯の河床の減少、遡上を妨げる堰堤の建設など。  
(執筆者: 山口 勝秀)

## 準絶滅危惧 (NT)

スズキ目カジカ科

# カジカ中卵型

*Cottus* sp.

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
—	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

撮影者(提供者): 島根県立宍道湖自然館

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

絶滅危惧ⅠB類(EN)



### 選定理由

本種は、河川の水質や水生生物の生息環境が良好な比較的大きな河川中流部を中心に生息しているが、その生息数は多くなく河川の生息環境の悪化等にもない個体数が減少している。

### 概要

日本固有種で、北海道南部、本州青森県から山口県の日本海側、愛媛県に加茂川、九州の有明海に注ぐ河川に分布する。カジカは、大卵型・中卵型・小卵型に分けられており、これらはすでに種レベルにまで分化していることが知られている。中卵型は河川中・下流部の瀬の石の下にオスが縄張りを張り、メスを呼び込み産卵させる。大卵型は河川の上流域に生息し、海に下ることがないのに対し、中卵型はふ化後、仔魚は川を流下し海に入り、そこでしばらく浮遊生活を送る。春2cm程度に成長した稚魚が川を遡上し、水生昆虫などを餌として成長する。本種は底生生活に適応した縦扁した体形をしており、体色は淡褐色から暗褐色ま

#### 参考文献

川那部浩哉・水野信彦・細谷和海編 (2001) 改訂日本の淡水魚. 719pp. 山と溪谷社, 東京.  
宗原弘幸編 (2011) カジカ類の多様性: 適応と進化. 276pp. 東海大学出版会, 神奈川.  
中坊徹次・甲斐嘉晃 (2013) カジカ科. 中坊徹次 (編) 日本産魚類検索全種の同定第三版: 1160-1188. 東海大学出版会, 東京.  
菅野一輝・乾 隆帝・白井厚太郎・鬼倉徳雄・小山彰彦・澤 海人・若林瑞希 (2019) 高梁川水系のカジカ種群の分布と遺伝的・形態的・生態的特徴. 日本生物地理学会会報. 74: 25-31.

で変化に富んでいる。本種とカジカ大卵型とカジカ小卵型は形態的に酷似しているが、胸鰭条数の違いにより区別され、大卵型は12-14本、小卵型は15-17本であるのに対し、本種は胸鰭の軟条はすべて分岐せず、軟条数が13-16本である。産卵形態はカジカ大卵型とほぼ同じであるが、卵径を比較すると本種の方が幾分小さい。

### 県内での生息地域・生息環境

県内において生息が確認されている河川は、高津川や江の川、斐伊川、神戸川、浜田川、飯梨川などの大～中型の河川である。河川中～下流部の早瀬や平瀬の浮石のあるような環境に生息しており、上流部には陸封性のカジカ大卵型が生息していることが多い。

### 存続を脅かす原因

河川改修等に伴う生息場の悪化や減少、河川構造物による移動障害など。  
(執筆者: 佐藤 仁志)

## 準絶滅危惧 (NT)

スズキ目ハゼ科

# オオヨシノボリ

*Rhinogobius fluviatilis* Tanaka, 1925

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
—	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

撮影者(提供者): 島根県立宍道湖自然館

島根県固有評価

—
---

環境省カテゴリー

—
---



### 選定理由

水量が豊富で流れの早い場所に生息し、生息数もあまり多くない。近年、減少傾向にある。

### 概要

全長は約8cm、時に10cmを超える個体も見られる。全体的に黒味が強く、特に繁殖期のオスはほとんど黒一色となる。メスと未成魚は淡褐色の地に濃褐色の不規則な斑点がある。頬には斑紋がない。胸びれの根元に明瞭な1個の黒色斑がある、尾鰭の基部に上下に長い黒色斑が1個あることなどが本種の特徴である。国内では北海道を除く日本全国に分布し、雑食性で付着藻類や水生昆虫などをおもに食べる。

### 参考文献

明仁・坂本勝一・池田裕二・藍澤正宏(2013)ハゼ亜目。中坊徹次(編)日本産魚類検索全種の同定第三版:1347-1608。東海大学出版会、神奈川。  
中野浩史(2015)改訂しませレッドデータブック2014動物編:318。島根県環境生活部自然環境課、島根。

### 県内での生息地域・生息環境

県内においては、比較的大型の河川に生息する傾向が強く、西部の河川で生息数が多い。県中部から東部の河川では、生息数が少ない。

### 存続を脅かす原因

河川改修などに伴う生息環境の悪化など。

(執筆者: 中野 浩史)

汽水・淡水魚類

## 情報不足 (DD)

コイ目 コイ科

# タモロコ

*Gnathopogon elongatus elongatus* (Temminck and Schlegel, 1846)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
—	—	情報不足 (DD)

撮影者(提供者): 桑原弘道

島根県固有評価

—
---

環境省カテゴリー

—
---



### 選定理由

河川改修などによる生息確認場所の減少。宍道湖周辺では移入種のホンモロコとの交雑。

### 概要

日本の固有種で、中部地方以西の本州と四国が自然分布。平野部の流れの緩やかな川や用水路、浅い池、沼の水草や藻の中に生息する全長6—12cmの小型の魚。ホンモロコに似るが、本種の口ひげは瞳孔径より長く喉部は丸く、第1鰓弓の鰓耙数は6—12なのに対し、ホンモロコの口ひげは瞳孔径より短く喉部は角張り、第1鰓弓の鰓耙数は14—20。産卵期は4—7月。川の浅瀬の砂底や藻などに卵を付ける。卵は球形の粘着卵で卵径は約1.3mm。受精後5—8日(水温20—25℃)で孵化。孵

### 参考文献

平塚純一・桑原弘道ほか(未発表)宍道湖マス網調査 1995-2004年。  
細谷和海(2013)コイ科。中坊徹次(編)日本産魚類検索全種の同定第三版:324。東海大学出版会、神奈川。  
越川敏樹(2005)改訂しませレッドデータブック:84。島根県環境生活部景観自然課、島根。  
桑原弘道(未発表)宍道湖マス網調査2013-2025年。  
宮地傳三郎・川那部浩哉・水野信彦(1983)原色日本淡水魚図鑑:116-117。保育社、大阪。

化仔魚は約4mm、1年で6—7cm、2年で9—10cm位になる。多くは1年で成熟する。水生昆虫や半底生の浮遊動物のほか水草や小魚の幼魚を食べる。

### 県内での生息地域・生息環境

主に出雲地方の平野部にある田畑の水路や宍道湖・中海、神西湖の流入河川に生息。

### 存続を脅かす原因

水路の護岸改修や圃場整備などにより生息域や繁殖域が減少した。移入種のホンモロコと同じ水域に生息している地域もあり、本種との交雑も心配される。

(執筆者: 桑原 弘道)

絶滅野生絶滅

絶滅危惧I類

絶滅危惧II類

準絶滅危惧

情報不足

## 情報不足 (DD)

コイ目ドジョウ科

# ドジョウ

*Misgurnus anguillicaudatus* (Cantor, 1842)

カテゴリ区分

2004	2013/2014	2026
-	-	情報不足 (DD)

撮影者(提供者): 佐藤仁志

島根県固有評価

-

環境省カテゴリ

準絶滅危惧(NT)



### 選定理由

以前は県内各地の水田や土水路等に広く生息していたが、近年本種の生息する場所は山間の棚田がある水路など限られた場所となってきた。水田の圃場整備などが進み、水路との行き来ができなくなってきたことなどから、各地で姿を消しつつある。

### 概要

日本各地、アムール川からベトナム北部、朝鮮半島、サハリン、台湾島、海南島に生息。全長15cm。体は細長く、やや側扁する。口ひげは10本。体色は淡褐色から暗褐色で、時に小黑点が散在する。オスの胸鰭先端はとがり、基部に丸い骨質盤を持つ。河川中・下流域、用水路などの流れの緩やかな基底にすむ。初夏に水田わきの水路などに侵入して産卵する。

#### 参考文献

林 成多・大井和之 (2020) 島根県東部赤川流域(斐伊川水系)のドジョウを対象としたミトコンドリアDNAハプロタイプの分析結果(予報)。ホシザキグリーン財団研究報告。(22): 241-244。  
林 成多・大井和之・佐藤仁志 (2022) 島根県産ドジョウのミトコンドリアDNAハプロタイプ。ホシザキグリーン財団研究報告特別号。(30): 1-10。  
中坊徹次編 (2013) 日本産魚類検索全種の同定第三版。2428pp。東海大学出版会、神奈川。  
中島 淳 (2017) 日本のドジョウ形態・生態・文化と図鑑。223pp。山と溪谷社、東京。

### 県内での生息地域・生息環境

隠岐島を含む県内全域に生息しているが、生息地は限定されており多くはない。圃場整備され用水路と排水路に大きな段差がある水田ではほとんど生息しておらず、山間部の棚田や平野部の排水の悪い水田、土水路などに限定的に生息している。

### 存続を脅かす原因

大規模な圃場整備等にもなう用・排水路の分離、揚水ポンプの設置、落差のある排水路、水路のコンクリート化など水田周辺部における生息環境の悪化のほか、以前生息し再生産していた水田における中干しや乾田化など。このほか、養殖や釣り餌用として持ち込まれた外来種を含む遺伝子の異なる近縁のドジョウの侵入など。

(執筆: 佐藤 仁志)

## 情報不足 (DD)

サケ目 シラウオ科

# シラウオ

*Salangichthys microdon* (Bleeker, 1860)

カテゴリ区分

2004	2013/2014	2026
-	-	情報不足 (DD)

撮影者(提供者): 島根県立宍道湖自然館

島根県固有評価

-

環境省カテゴリ

-



### 選定理由

宍道湖七珍の一つだが、近年漁獲が減っている。夏の続く高水温も影響している。

### 概要

生時は透明で、ワカサギなどキュウリウオ科の稚仔魚に似ており、これらが分化の過程で幼形成熟したものと考えられている。日本海側はサハリンから九州西部及び朝鮮半島までの汽水湖や河口域、海の沿岸に生息。産卵期は水温が5-8℃になる2-4月、川の河口域や湖内の水深3m以浅の砂底や水草に産卵。卵は砂粒等に付着する。卵径1mm弱。受精後8-27日(水温15-8℃)で孵化。全長約5mm、3日で卵黄を吸収し暫くは産卵場付近に留まるものもあるが、夏返には汽水湖や海に下る。

#### 参考文献

平塚純一、桑原弘道ほか(未発表) 宍道湖マス網調査1995-2004年。  
桑原弘道(未発表) 宍道湖マス網調査2013-2025年。  
松原善代松(1973) 魚類学(下): 507-514。恒産社厚生閣、東京。  
富地博二郎 川那部浩哉 水野信彦(1983) 原色日本淡水魚図鑑: 116-117。保育社、大阪。  
細谷和寿(2013) キュウリウオ亜目。中坊徹次(編) 日本産魚類検索全種の同定第三版: 358-361。東海大学出版会、神奈川。

1年で9-10cmに成長し、翌年、卵を産み一生を終える。主に小型の浮遊動物を捕食する。

### 県内での生息地域・生息環境

県内では宍道湖中海やその流出河川、流入河川の河口域、神西湖などにも生息する。

上田常一著山陰の動物誌によると、1960年代までは隠岐の八尾川に産卵のため群れを成してのぼっていたようだ。

### 存続を脅かす原因

近年の夏場の表層水温が30℃を越す日が何日も続く宍道湖中海では、ワカサギほどではないにしろ生息しづらい環境になっている。

(執筆: 桑原 弘道)